

は遠
初め
を帯
こう
なが
あり
庸氏
あり
動を

第8回

石井至の世界放浪記

アブハジア珍道中

この原稿は、パリのシャルル・ドゴール空港で書いている。ここ数か月はほとんど日本にいない。前回はスパイ・ゾルゲについて書いた。引き続きアゼルバイジャンについて書くかと思っただが、その前に、六月に木村三浩さんと一緒にアブハジアを訪問したので、その珍道中について今回紹介する。

木村さんから「アブハジアが観光推進をしないと行っていい。石井さん、観光推進について詳しいんでしょ。一緒に来てよ」と言われ、行くことにした。木村さんが、二〇一一年八月に実施されたアブハジア大統領選挙の国際選挙団として訪問したことは聞いていた。今回は、そのときに当選したアंकワブ大統領との面談もするのだという。

ご存じかもしれないが、アブハジアは、いわゆる限定的に独立承認されている国で、独立承認している国はロシアをはじめ約十ヶ国と限られている。グルジアはアブハジアをグルジア領土だと主張しているが、実際はアブハジア政府自身がすでに実効支配している。木村さんは民族自決の原則からアブハジアの独立承認の動きを支援している。木村さんは仲間二名とソチに先乗りしていた。私はスペインで、バスク独立を主張し昨年の州議会選挙で第二位に躍進したe hビルドゥのラウラ・ミンテギ党首との会談がビルバオであったので、半日遅れでソチに行き、ラディソンブルーホテル

で合流した。

アブハジアの首都スクム(グルジア語ではスク「ミ」と言われるが、現地ではスク「ム」と呼んでいる)までは車で約二時間半だが、現地に向かう前にソチ市の職員にオリンピック・パークの見学をさせてもらった。さすが木村さんはぬかりない。

そこではアイスホッケー場とスピードスケートリンクを見学した。アイスホッケー場には巨大な直方体の形をしたパナソニックのマルチビジョンが天井からぶらさがっていた。スピードスケートリンクでは、五輪出場選手には申し訳ないが、我々は表彰台におそらく日本人として初めて登壇した。もちろん記念撮影のためである。オリンピック・パークのいくつかの施設は完成しすでに競技も行われたようだが、残りの施設は急ピッチで建設していた。

オリンピック・パーク見学後、いよいよアブハジアに出発だ。実は国境までは車で二十分もかからない。夏のピーク時には、出入国審査のために国境を超える車で渋滞し、国境通過に二時間以上かかることもあると言ふ。それほどロシア人(中流の人たち)には人気のある観光地になっているが、ロシア人以外の外国人観光客はほとんどいない。

国家として独立するためには産業が必要だ。お金がないと何もできない。いつまでもロシアに「おんぶにだっこ」というわけにもいかないだろう。そこで様々な試行錯誤の中で、観光業

で食っていけるかについて「専門家」である私の意見を聞きたいというのが訪問の趣旨だ。

結論から言えば、将来性は十分だ。特にピツンダというビーチリゾートは、ソ連時代のリーダーであったフルシチョフやその後任のブレジネフのダーチャ(別荘)があった場所です晴らしかつた。ソ連時代はアブハジアはソ連の一部だったから、ソ連のリーダーのダーチャがあったのだ。今のロシアのリーダーのプーチン大統領は、同じく黒海沿岸のソチにダーチャを持っている。

ピツンダの海の美しさと雰囲気は世界のトップクラスのリゾートに成り得る可能性がある。世界中の超高級リゾートを渡り歩いている私が言うのだから(随分古いが一問違いない)。ただ、宿泊施設は総じて古い。中級からバックパッカー用のものしかない。木村さんにいたっては「開き直って、ソ連時代の雰囲気溢れる宿泊施設というので宣伝するしかないんじゃないの?」と言う始末。確かに、一九七〇年代のソ連の雰囲気溢れていて、ある種のノスタルジーを感じた。

アブハジアの観光開発を考える

しかし、それでは観光客一人あたりの単価は上がらない。受け入れ人数には限りがあるから、客単価を上げるのが観光業として成功するポイントだ。高くて来なくなる。そういうところにならないとダメだ。

そういう問題点をハッキリとは大統領にも観光委員会会長にも言わなかった。言わずもがなだからだ。しかし、私には高級リゾート開発の秘策がある。旧あるいは現共産圏の観光地を数多く歩いた私は、ピツンダが大ブレイクするための秘策を思いついてしまった。もちろん商売(?)のネタだからここでは明かせないが。

今回の木村さんとの珍道中も色々な示唆に富んでいた。もちろん大統領と話をするという貴重な機会を与えてくれたわけだが、そういうことだけでなく内省的な面でも、である。木村三浩のことをよく理解できたと共に、自分自身のことでもよくわかったのだ。

木村さんは、たとえば都内で会食しているときに近くで子どもが騒いでいるとイライラしているのが手に取るようにわかる。また、手際が悪くて待たされていると一言声をかける感じが漂ってくる。気が短いように思える。ところが一方、交渉や会談の場面ではイライラしない。冷静に、相手の良いところや共通点を取り上げて場を和ませる。不思議なのだが、さすが新右翼のリーダーだ。

逆に、私は幼児教室を経営しているくらいだから子どもが騒いでも気にならないし、少々待たされてもイライラしない。でも、交渉や会談の場面でも、相手の態度が悪いと思わずムカツとしてしまう。

アブハジアの様々な面談の中には、現実をわきまえずに「お前は何様だ。そんなに偉いのか。死ぬまで言ってる」と言いたくなるような発言をする人が数人いた。私はそういう筋違いの人たちは大嫌いなので、「勘違い

も甚だしい。こんな奴らとは話ができない」とすぐに怒ってしまったが、普段は短気な木村さんは冷静に場を和ませる。不思議な話だ。

ムカツとして怒り出す私に、木村さんは「石井さん、アブハジアは合わないんじゃないの?」と道中に何度か言われたが、確かに、少数でもムカツク人がいると、助言してあげようと思う気持ちが萎えるのも事実だ。

以下は帰国後の付け足しで余談であるが、帰国後に私が有識者を見せて頂いている観光庁から連絡があった。どうして私がアブハジアに行ったことを知っているのか不明だが、駐日グルジア大使が観光庁長官に対して、「観光庁の有識者・石井至がアブハジアにロシア経由で入国したのは遺憾だ。アブハジアはグルジア領だからグルジアから入るべきだ。ロシアからの入国は違法だ」という趣旨の苦情があり、日本の外務省からはアブハジアはグルジアの一部というのが日本の立場ですので、そのことをご承知おきください」という趣旨の連絡があったと言われた。観光庁の方々に余計な仕事を増やしてしまい申し訳ない気持ちだ。つまりレベルの高い国際問題なのである。

さあ、木村さんがアブハジアを応援するプロジェクトは、今後、どんな展開になるのか。民族自決か、グルジアの国民国家か、公正な判断が必要だろう。

石井 至 (いしい・いたる)

昭和四十年、北海道生まれ。東京大学医学部卒。フランス系のインドスエス銀行を経て、平成九年に石井兄弟社設立。同社代表取締役。金融ハイテク技術コンサルタントを行う他、東京にて幼児教室「アンテナ・プレスクール」を主宰。

から
てい
ば、
言わ
しよ
も、
まし
ま
だけ
ずか
と、
大騒